

現代学生の規範意識と態度 (2)

小 杉 考 司

Present students' attitude toward norms, politics and society (2)

KOSUGI E. Koji

(Received September 30, 2011)

1 はじめに

3月11日に起こった東日本大震災、それに伴う福島第一原発の事故など、2011年は歴史的な出来事が生じた年として語り継がれることになるだろう。こうした大きな社会的出来事は、少なからず我々一人ひとりの人間観や社会に対する態度に大きく影響を与える。例えば1995年1月17日に起こった阪神淡路大震災は、多くのボランティア活動を産み、特定非営利活動促進法でNPOが法人格をもつよう法律化される原動力となったし、トラウマやPTSDなどの臨床心理学的用語が広く知られるようになった。このような大きな災害は、当時の大学生に強烈な“現実感”を与え、人間に自然に生じる協力、愛着、連帯関係の再発見を促したといえるだろう。

自然災害の問題だけでなく、大きな犯罪（地下鉄サリン事件や神戸児童連続殺傷事件など）、あるいはよりよい意味での社会的出来事（サッカーワールドカップやWorld Baseball Classic、北京万博など）もその時代を生きる人間の記憶に深く刻まれる。また、これら一時的な出来事だけでなく、長期的な社会変化が意識しないうちに態度形成に影響を与えることを見過ごしてはならない。

長期的な社会変化、例えば現在長期的な不況状態にあることや、高度情報化が進んでいることはしばしば世代間の意識の差を生む。例えば平成の大不況と呼ばれる昨今、その始まりをバブル崩壊から数えるならば、1990年からの20年間にわたって不況が続いていることになるが、これは現代大学生が生まれてから今まで好景気で沸く社会を経験したことがなく、成長する社会像を具体的にイメージできないことを意味する。1950年代から1970年代にかけての高度経済成長、1980年代後半から1990年代までのバブル景気を知らない世代にとっては、消費はすべて浪費であり、節約、緊縮、縮小する財政下でいかに効率よく、合理的に生きるかということを考えさせられ続けた世代であるともいえる。平成の世はまさに、「平」たく「成」熟した社会であるかも知れないが、裏を返せば「国民所得倍増計画」といった、大きな夢を見ることを思いも付かない世代をつくりだしている。

また、経済的かつ合理的に物事を判断するための道具として、同じく1990年代から始まった高度情報化の波は、確実に我々の生活スタイルを変え、それに伴う心理的反応を変えてきた。Windows95が発売された1995年以降は、テキスト、音声、静止画、動画の全てがデジタル化されるようになった。この、あらゆるコンテンツがビット演算の対象として一元化されたことが情報化の本質であり、それらの演算を統一的に扱えるプラットフォームとしてのパーソナルコンピュータが日常生活に浸透したことは表層的な意味でしかない。通信手段はポケベル、PHSを経て携帯電話になり、テキストによる通信すなわち電子メールから、音声・動画が送

れる媒体へと変化した。そして2010年の現在では改めてテレビ電話という呼称を使うこともなく、リアルタイムに互いの顔を見ながら携帯端末で話をする（例えば iPhone をつけた face time）ことが可能になっている。こうした人と人とをつなぐ技術の大幅な進歩は、人間関係のあり方も変えたといわれる。例えばサル学の研究者であった正高（2003, 2006）は、携帯端末のヘビーユーザーとライトユーザーを比較して、前者が後者よりも目先の利益に飛びつき、他人を裏切ることをいとわない行動パターンを取ることを示している。

さて、社会心理学は、方法論的個人主義かつ状況主義を標榜する学問である。すなわち、社会学のようなマクロなデータ（大規模サンプリングデータや集計された指標）を扱うのではなく、調査・実験などによる個人に結びついた変数を扱い、かつ個人を取り巻く状況を独立変数として、個人の行動を従属変数とする。もちろんここには、個人の心理状態を $y=f(x)$ の関数として、様々な x を与えたときの y の状態から関数 f を帰納的に推論するという心理学全体の思想、すなわち関数主義 functionalism が大前提として横たわっている（道又, 2008）。心すなわち関数は、一般にどの人間にも当てはまる共通の様式であると考えられており、その点で普遍的な人間性を問題にする。このことは上で述べたような、中長期的な社会変動による影響を対象としえないことにつながる。もちろん多くの CMC 研究など（例えば河上・河浦・池田・古川, 1993）、新しいメディアや社会状況を取り込む研究が盛んになされるが、そのモデルは基本的に「新しい」刺激に対する「普遍的な」人間モデルの反応を明らかにするだけである。

本研究は、長期的な時間展望と共に、徐々に変容する大学生の態度、意識を追うことを目的としている。同様の試みとして片桐（2003）は5年ごとに学生に対する調査を20年間繰り返し、比較的長い時間スコープの中で若者の姿を捉えようとしている。本研究の目的も片桐（2003）の考えと軌を一にするものであり、先行研究（小杉・渡辺, 2010）に続く第二報である。

2 方法

本稿では、先行研究（小杉・渡辺, 2010）で用いられたデータと、今年度新たに取られたデータの二種類を統合して用いる。新たに取られたデータの特徴は次の通りである。まず調査対象者は、山口大学の大学生135名。年齢は18歳から22歳、平均18.25 ($SD=0.64$)。男性68名、女性67名。調査は筆者の担当する共通教育科目、「心と社会の心理学」の第1回目の時間を利用して行われた。実施日時は2011年4月13日である。調査項目は、調査全体としては、Graham, Haidt, & Nosek（2009）の道徳基盤尺度を筆者が訳したものの22項目、多面的楽観性尺度12項目、就労同機尺度42項目、その他の項目からなる。以降、本研究では特に尺度として構成されていないこの「その他」に分類される複数の項目について、それぞれの集計結果を示しつつ論を展開する。ただし、Graham らの尺度分析については Kosugi, Fujisawa & Shimizu（2011）で論じられている。

3 結果と考察

3.1 回答者の属性

既に述べたように、本研究では先行研究のデータ（2010年度）と本年度（2011年度）のデータをあわせているので、全体は男性242名、女性161名、性別不明2の合計405名分のデータである。うち、自宅生は67名（16.5%）、一人暮らしが290名（71.6%）、寮生が27名（6.6%）となっている。

3.2 大学生活や人間観について

■**大学入学の目的** 大学入学の目的を、複数回答可で「大学入学の目的として該当する番号を○で囲んでください」とした設問では、表1にあるような答えが得られた。もっとも多くの回

表1 大学入学の目的（複数回答可）

項目	度数	比率
大学で学びたいことがあったから	257	63.5%
就職を有利にするため	214	52.8%
大学に行くのは当然だと思っていたから	175	43.2%
社会に出る前にもう少し時間がほしかったから	154	38.0%
大学卒の肩書きがほしかったから	149	36.8%
教員免許等の資格がほしかったから	119	29.4%
友人を作るため	104	25.7%
遊びたかったから	67	16.5%
親の勧めで	52	12.8%
特に理由はない	9	2.2%

答を得たのが、「学びたいことがあった」というものであるが、第三位に「大学に行くのが当然だ」という回答もみられた。文部科学省によれば、2011年の学校基本調査（文部科学省、2011）によれば大学進学率は54.4%であり、もはや大学に行かないことがマイノリティである状況を反映している。

■**友人選択の基準** 大学において友人選択の基準を、複数回答可で「あなたは、どのような性質の友人を好みますか。」とした設問では、表2にあるような答えが得られた。回答は上位から順に「明るい」「思いやりのある」「頼りになる」であり、いずれも社会的に好ましい人物であることからこれらの要素が上位に来るのはある意味当然であろう。逆に、下位に「男らしい」「女らしい」「知的な」「かわいい」など、性役割観が友人選択の基準にならないことが特徴的であるといえるかもしれない。ただし、教示文が同性の友人、異性の友人のどちらとも特に指定していない点には注意が必要である。

■**自らの性別に対する態度** それでは、性別に対する態度はどうか。片桐（2003）にならって、「生まれ変わるとしたら男性、女性のどちらがよいか」という問いに対する回答は、表3に挙げたとおりである。表3の回答分布は χ^2 検定の結果有意な偏りを示しており（ $\chi^2(2)=23.05$, $p<.01$ ）、残差分析の結果から男性は男性に、女性は女性に生まれ変わりたいという回答が有意に多いことが明らかになった。一方で性役割期待に対する質問（「あなたは男性（女性）らしいね、と言われたらうれしいですか」）については表4のようになり、 χ^2 検定の結果有意な偏りは見られなかった（ $\chi^2(2)=1.968$, $n.s.$ ）。

ここから自らの性に対する積極的な支持、あるいは積極的な反発ではなく、受動的あるいは消極的に現状を捉えようとする学生像を思い描くことも可能ではないだろうか。

表2 友人選択の基準（複数回答可）

項目	男性回答率 (%)	女性の回答率 (%)	総数
明るい	71.49	73.91	292
思いやりのある	66.12	70.80	274
頼りになる	65.70	64.60	263
親切な	57.02	60.25	235
ノリの良い	55.37	54.04	221
ユーモアのある	57.02	55.28	227
元気な	53.30	54.04	216
正直な	52.07	46.58	201
寛大な	47.11	43.48	184
礼儀正しい	43.39	44.72	177
責任感のある	41.32	42.86	169
真面目な	31.00	31.68	126
聞き上手な	26.03	26.09	105
かわいい	25.20	26.71	104
知的な	29.75	19.88	104
男らしい	18.18	16.77	71
女らしい	12.40	5.00	38

表3 生まれ変わるとしたら

回答者	男性に生まれ変わりたい	女性に生まれ変わりたい	どちらとも言えない
男性回答者	114	35	63
女性回答者	51	56	54

表4 男性（女性）らしいね、といわれたら嬉しいですか

回答者	はい	いいえ	一概に言えない
男性回答者	107	20	115
女性回答者	65	9	86

■将来の展望に対する態度 まず、結婚に対する態度としての項目に対する回答は表5のようになった。表5の回答分布は χ^2 検定の結果、10%水準で有意な偏りを示しており（ $\chi^2(2)=5.01, p<.10$ ）、残差分析の結果男性は「必ず結婚したい」と答え、女性は「適当な相手がいれば」と答える傾向がみられた。

次に経済状況について、まず現状を「あなたは現在の実家の経済状況に満足していますか」として回答を求めたところ、「かなり満足している」と答えたのが109名（27.05%）、「どちらかといえば満足していると答えたのが206名（51.12%）であり、「どちらかといえば不満（68名、16.87%）」「かなり不満（20名、5.12%）」との回答に比べてかなり満足している割合が高いこと

表5 結婚について、今のお考えをお聞かせください

回答者	いずれは必ず結婚したい	適当な相手がいれば	結婚したいしくない
男性回答者	171	64	6
女性回答者	97	59	5

がわかる。これを踏まえて、今後の展望として「将来、あなたが実家から独立して生活するとき、現在の実家の状況よりも経済的に向上したいですか」と問うたところ、表6のような回答が得られた。ここから明らかなように、約1/3は向上したくない、あるいはどちらでも良いと回答することがわかる。

表6 経済的に向上したいですか

カテゴリ	度数	比率
まったく向上したいとは思わない	3	0.74
あまり向上したいとは思わない	10	2.51
どちらでもよい	118	29.28
やや向上したい	171	42.43
かなり向上したい	102	25.31

■アイデンティティの持ち方について 次に、自分自身のことについて、「あなたはどのように生きて自分らしく生きていられるか、つかめていますか」との問いに対して、表7のような回答が得られた。興味深いのは、「いずれつかめるだろう」との楽観的態度が最も多く、「大体つかめている」との回答がそれに次いで多いことである。このことが即、学生のアイデンティティの確立度を反映しているという結論を出すのは早急に思われるし、楽観的という点では逆に「私の人生こんなもの」と将来への可能性を放棄しているとも考えられる。

表7 自分らしさの確信

カテゴリ	度数	比率
1. はっきりつかめている	18	4.47
2. だいたいつかめている	142	35.24
3. 今はつかめていないがいずれつかめるだろう	174	43.18
4. 今もつかめていないしつかめるかどうかわからない	69	17.12

楽観性について、多面的楽観性尺度（安藤・中西・小平・江崎・原田・川井・小川・崎濱、2000）にたいする回答はどうだろうか。12項目からなるこの尺度は、信頼性係数が $\alpha=0.8$ 、4因子構造を仮定した時の $\omega=0.88$ と高いため、合計得点（逆転項目「昔の失敗や、嫌だったことについてくよくよと悩んでしまう」と「先のことについて色々考えたり、悩んだりすることが多い」は点数を反転させて加算）を楽観性得点とした。算出された楽観性得点は、平均36.13、標準偏差5.49、最大値56、最小値20となった。

表8 多面的楽観性尺度（安藤ら, 2000）の分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	h ²	mean	sd
困ったことが起きても、悩んでも仕方がないと思うのであまり気にしない	0.858	-0.025	-0.034	0.060	0.672	2.71	1.16
何か物事に失敗しても、仕方なかったと思いきなり悩まない	0.817	0.048	-0.060	0.108	0.585	2.71	1.10
何事もあれこれ思い悩まない	0.687	-0.016	0.008	-0.149	0.593	2.52	1.04
失敗しても、それにこだわらない	0.683	-0.046	0.156	0.057	0.489	2.85	1.15
自分ではどうしようもないと思うことは、あまり深く考えない	0.541	0.108	-0.064	-0.010	0.311	3.12	1.07
昔の失敗や、嫌だったことについてくよくよと悩んでしまう	-0.444	0.012	-0.041	0.197	0.332	3.43	1.20
困ったことがあったら、きっと誰かが助けてくれると思う	0.000	0.876	-0.051	0.012	0.717	2.75	1.03
失敗しそうになると、必ず何かが助けてくれると思う	0.044	0.829	-0.065	0.079	0.629	2.64	1.01
人に頼み事をしたときには、必ずきいてもらえると思う	-0.090	0.661	0.027	-0.097	0.466	2.71	0.99
この先、人との巡り合わせはよいと思う	-0.008	-0.075	0.962	0.037	0.841	3.63	0.93
周りの人は、自分に親切にしてくれるだろうと考えている	-0.039	0.248	0.399	-0.039	0.328	3.34	0.93
先のことについて色々考えたり、悩んだりすることが多い	0.022	0.034	0.038	0.966	0.896	3.75	1.01
負荷量二乗和	2.833	1.932	1.082	1.012			
寄与率	0.236	0.161	0.090	0.084			
累積寄与率	0.236	0.397	0.487	0.572			
因子間相関	1.000	0.182	0.245	-0.491			
		1.000	0.551	-0.163			
			1.000	-0.148			
				1.000			

アイデンティティの持ち方（自分らしさの確信）と性別を独立変数、楽観性得点を従属変数とした分散分析を行ったところ、各主効果と交互作用の全てが統計的に有意であったものの、総じて η^2 は低い。結果を表9と図1に示す。図1にあるように、女性（ $M=36.7, SD=5.31$ ）>男性（ $M=35.7, SD=5.58$ ）と女性は男性より楽観性が高く、自分らしさ別では「はっきりつかめている（ $M=38.76, SD=7.06$ ）」>「だいたいつかめている（ $M=36.87, SD=5.48$ ）」「いずれつかめるだろう（ $M=36.22, SD=5.06$ ）」>「つかめていない（ $M=33.54, SD=5.35$ ）」となる。修正Shaffer法による下位検定の結果、男性においては「だいたい」「いずれ」との回答が「つかめていない」より高く、女性においては「つかめている」と回答する者が他のカテゴリを選ぶ者よりも有意に楽観性得点が高い。

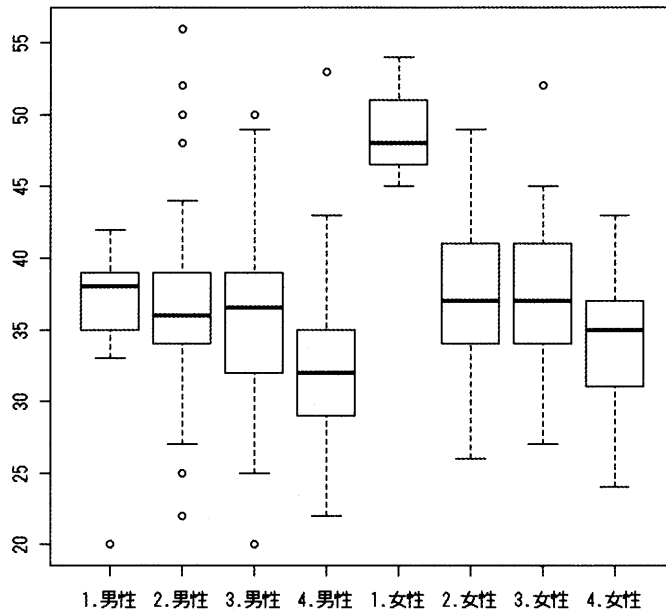


図1 カテゴリごとの分布。性別横の数字は表7に準拠

このことは、アイデンティティの持ち方と楽観性の因果の向きを明らかにするものではないことに注意が必要である。すなわち、アイデンティティがはっきりつかめているので楽観的でいられるのか、楽観的であるから自己についても楽観的でいられるのか、は判然としない。ただ、女性で「はっきりつかめている」と回答する者が群を抜いて楽観性得点が高いという特徴については心にとどめておく必要があるだろう。

表9 楽観性の分散分析結果

Source	SS	df	MS	F-ratio	η^2
A(アイデンティティ)	933.179	3	311.060	11.204	0.080
B(性別)	437.090	1	437.090	15.743	0.039
AxB	357.303	3	119.101	4.290	0.032
Error	10716.949	386	27.764		
Total	11843.5228	393			

■楽観性と大学選択の関係 最後に、この楽観性得点と大学選択、友人選択、将来展望の関係を総合的に捉えてみたい。まず、楽観性得点をパーセンタイルを用いて高・中・低の三群に分割し、大学選択の項目とあわせて数量化Ⅲ類法によってその関連性を見た。結果を図2に示す。図2にあるように、第一象限から第三象限にかけてアイデンティティの確立度が高くなる傾向にあり、同時に楽観性得点も高くなる傾向にある。第一象限には他に、大学選択の理由が「特にない」と回答した者や、「時間が欲しい」「就職のため」といった理由を挙げる学生がプロットされる。第三象限には、経済満足度の高い群と資格を目的とする回答と同時に、経済満足度が「どちらかといえば不満(4)」と回答する群もプロットされている。ここには例えば医者

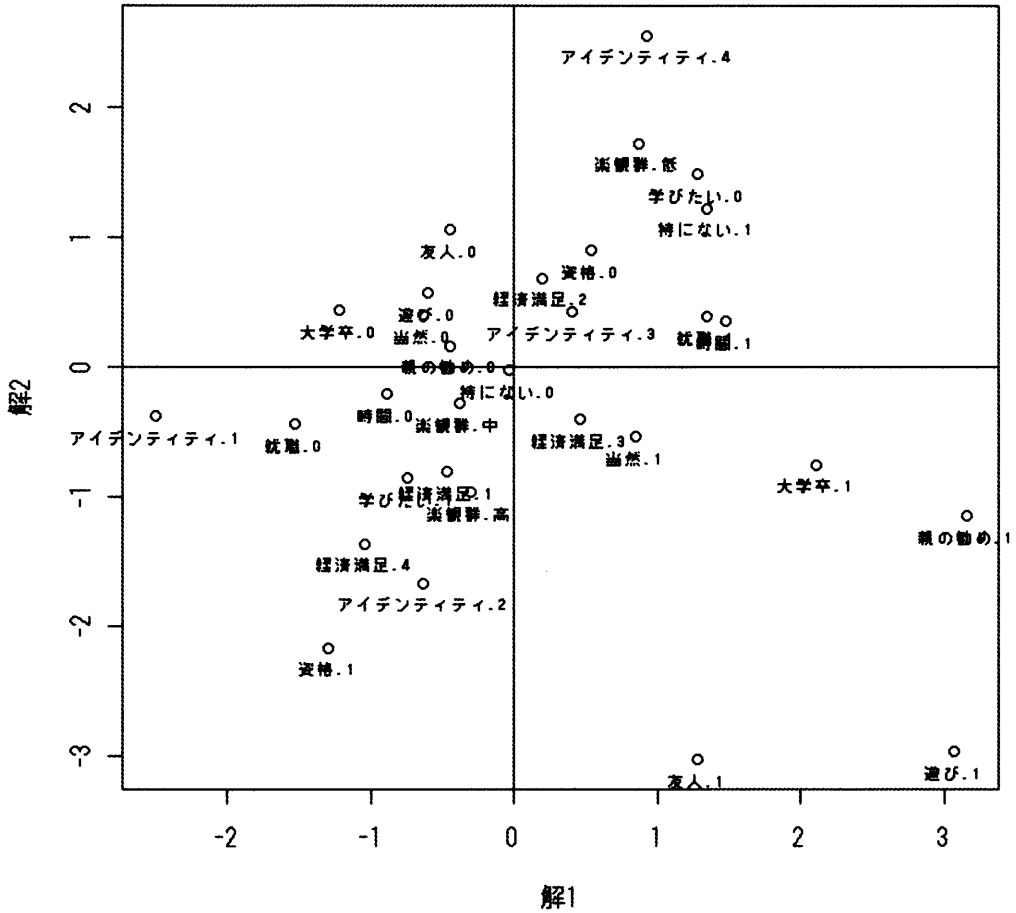


図2 楽観性と大学選択の関係分析の結果。大学選択の項目については、反応があるものを1、ないものを0とコード化している。

目指すために医学部に進学した裕福な家庭の学生と、満足ではないけれども人生を楽観的に捉える群が混在しているのかも知れない。注目すべきは第四象限で、生活満足度も中程度、大学に行くのは当然と考えており、とりあえず大学卒の肩書きをとるために、親の勧めで進学し、友人や遊びを楽しみたいという、あまり目的が明確でないと思われる学生の存在が読み取れる点である。

4 総合考察：好景気を知らずに僕らは育った

堀井（2006）によると、「若者」はつくりだされた概念である。消費を担う中心的存在として、既に社会の中に組み込まれた団塊の世代が、新たなマーケットとして創造したのが学生を初めとする「若者」である。「若者」は車に乗り、お酒を飲み、朝な夕な町に都会に繰り出して遊ぶことを期待された存在であった。マスコミはこぞって「若者」に対する広告メッセージを送り続け、その成果として1983年には「クリスマスは恋人と過ごすべき」という新しいマナーを作り、1987年にはディズニーランドを聖地化して人を呼ぶなど、バブルがはじけるまで「若者」を消費し続けた。

藻谷（2010）によると、バブル崩壊後の平成大不況は、高齢者が多く若者世代が少ないという人口動態的視点から説明される。すなわち、もっとも人口が多かった世代が高齢者になり、若者世代の人口がそれに比べて少ないため、「若者」をターゲットにしたマーケティングが成立しなくなっていると指摘する。若者が車を買わない、お酒を飲まないといったことを「車離れ」「お酒離れ」と嘆き、あるいは「草食系」とその精神性を揶揄するようなメッセージを送っても、それが経済へのでこ入れにならないのは、相対的な人口比の問題ではなく、絶対的な人口の問題であるとすればその解釈は容易である。むしろ、いわれのない根拠や見知らぬ好景気の時代を背景にそのメンタリティを非難される若者は被害者としてとらえられるべきだろう。

状況要因を過小評価し、人格的要因を過大評価するこの二重のバイアスのことを、社会心理学では基本的帰属錯誤と呼んできた。現代はこの警鐘に気づくことなく、過度に個人変数へでの現象理解を求めようとする傾向があるようだ。たとえば大学生のアイデンティティが十分に確立されていないから就職できないのだ、といったように。

溝上（2004）は学生のアイデンティティは、エリクソンが当初提唱したような、安定した社会のモデルを個人に取り込み形成する人格像、という考えがもはや破綻していると指摘している。エリクソン型アイデンティティを溝上（2004）は「アウトサイド・イン」のアイデンティティという。そして、現代において求められているのは「インサイド・アウト」型のアイデンティティである。それはすなわち、不安定な社会、正解や成功例を呈示してくれない社会に対して、まず自らの志向性や感性を確立させ、自らの内側から社会にその成果を問うていくスタイルである。そしてインサイド・アウト型のアイデンティティ形成は、依って立つ基盤がないところから作る必要があること、かつその形成過程にエラーが生じたとき、その責任が当該の（不安定で未完成な）個人に帰属させられる（「自己責任！」）という点で、より厳しい時代になっているといえるだろう。

これらを踏まえて、本論文で示された楽観的な態度や大学選択、友人選択、将来展望に対する態度をどのように捉えればよいのだろうか。一つには、社会が十分成熟し、経済的な苦勞をすることなく、学びたいことがあったから大学で学び、明るく思いやりのある友人と楽しいキャンパスライフを送るという、余裕のある社会が成立しつつあると読み取れるのかもしれない。一方で、筆者が危惧するのは、失敗のできない辛く厳しい状況だからこそ、責任を放棄するような形で楽観性を身につけ、あるいは進学や就職にあたっては確実な保証を求め、友人には思いやりを持っていただきます、といういわば窮鼠猫を噛むような状態でキャンパスライフを送る学生像とも読めることである。

どのような形で自己を作り、社会と対応していくのがよいのか、正解があろうはずもない。であればこそ、より長期的な視点を持った社会学的社会心理学が、今後より重要になってくるに違いない。

5 参考文献

- 安藤史高・中西良文・小平英志・江崎真理・原田一郎・川井加奈子・小川和美・崎濱秀由行
2000 多面的樂觀性尺度の作成 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 47, 237-245.
- Graham, J., Haidt, J., and Nosek, B. A. 2009 Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 1029-1046.
- 堀井憲一郎 2006 若者殺しの時代 講談社現代新書.
- 片桐新自 2003 停滞社会の中の若者たち—収斂する意識と「まじめ」の復権— 関西大学『社会学部紀要』, 35, 57-97.
- 川上善郎・川浦康至・池田謙一・古川良治 1993 電子ネットワーキングの社会心理誠信書房.
- Kosugi,K., Fujisawa, T.and Shimizu,H. 2011 Verification of the Moral Foundations Theory in Japan. The 12th European congress of psychology.
- 小杉考司・渡辺成 2011 現代学生の規範意識と態度 (1), 山口大学教育学部研究論叢第三部, 60, 49-60.
- 正高信夫 2003 ケータイを持ったサル 中公新書.
- 正高信夫 2006 他人を許せないサル 講談社ブルーバックス.
- 道又 爾 2008 心理学入門一歩手前 勁草書房.
- 溝上真一 2004 現代大学生論 NHKブックス.
- 藻谷浩介 2010 デフレの正体 角川oneテーマ21.
- 文部科学省 2011 学校基本調査平成23年度速報.